

学生のページ

第 66 回総会学術大会に参加して

名古屋大学大学院医学系研究科医療技術学専攻
伊藤理江子

出発前に期待していたこと

今回、第 66 回総会学術大会に参加するにあたり、私は過去 2 回参加した際とは違う心境でした。これまで学部 4 年次および修士課程 1 年次と 2 年間参加させていただきましたが、いずれも自身の発表はなく、他の先生方の発表や講演を聴くのみでの参加でした。ところが今回は、自身の研究発表をさせていただけることとなったため、ただ聴く側ではなく、発表する側としての準備が必要でした。そのため、今回の総会学術大会ではさまざまな研究発表を聴いて自身の知識をプラスすることとともに、多くの方に自身の研究を理解していただくことを目標としていました。また学会開催期間の 4 日間で、発表や講演を聴くだけでなく、多くの先生方とお話できる機会もあるのではないかと期待を込めていました。

研究発表内容について

私は現在、動画対応 flat panel detector (FPD) における画質評価を行っています。学部生の頃から継続して続けている研究であり、何度も失敗を繰り返しながらこれまで進めてきました。この総会学術大会で発表させていただくにあたっては、何度もデータを取得し、検討を重ね、しっかりと準備を行ってきました。先生にもスライドチェックやリハーサルを何度も行っていたが、納得するまで準備してきた結果、無事発表を終えることができましたと感じています。質疑応答でも質問をいただき、今後の研究課題が見つかるとともに、アドバイスをいただくことができて大変満足できる結果となりました。質問で指摘していただいた部分をもう一度検討し直し、しっかりと内容を詰めていこうと思っています。

また、幅広い方々に自分の研究を理解していただけるような説明方法を考えることで、これまでよりもっと研究内容を深いものにすることができたと感じています。

今後にどのように生かしていくか

今回の発表経験を生かし、今後も国内外の学会発表に積極的に参加していきたいと考えています。私の研究を初めて目にする方にも理解していただきやすい発表にするためにはどのような表現にしたらよいか、今回の発表を通して学ぶことができました。

また、この総会学術大会後にスイスのジュネーブで開催される CARS (Computer Assisted Radiology and Surgery) に参加予定であったため、発表するポスターを作成しなければならませんでした。英語でポスターを作るにあたって、分かりやすい表現を考えることは難しく、なかなか思うように進みませんでした。海外の方にもより分かりやすいものにするため試行錯誤を繰り返しながら作り上げていきました。このポスター作成においても、総会学術大会での経験やアドバイスを非常に役に立ったと感じています。

今後も、さらに多くの学会発表を通してより多くの方に発表を見ていただき、ご意見をいただければと思います。また多くの方の前でスピーチをする機会はなかなかなく、非常に貴重な経験であったため、これを通して培った度胸を生かして、社会に出ても多くの人に挑戦していきたいと考えています。

日本放射線技術学会に期待すること

今後も放射線技術の分野は常に進歩し、新たな技術が次々と発表されてくることと思います。そのため私たち学生や病院の技師の方々が、そのような最先端の技術に触れることができる学会は大変貴重な場であると思います。さらに技術学会は、いろいろな面で学生も参加しやすく、多くのことを学び、多くの方と交流することができる場であると感じています。学生の間にこのような貴重な体験ができることは、今後社会に出て行くにあたりとてもプラスになることと思います。これからもこの分野に関するたくさんの情報を、学会や雑誌、研究会を通して発信していただきたいと思います。

学生のページ

第 66 回総会学術大会に参加して

京都医療科学大学医療科学部放射線技術学科
宇野貴大

この総会学術大会に参加した目的は、現在大学で行っている卒業研究についての知識や理解を深めるためでした。また、この学会は放射線技術学のあらゆる分野が一挙に集まるため、非常に多くの知識を得ることができます。そして臨床経験のない私たち学生にとっては、臨床の現場や問題点を知ることのできる貴重な機会です。ここで学んだものは今後の研究や臨床の場で大いに役立つものだと考えています。今回の学会では私は発表しませんでした。その分新しい知識を多く得ようと張り切ってこの学会に向かいました。学会参加前には予稿集を読み、スケジュールを組みました。学会に参加するのは初めてでどの講演を聴こうか迷いましたが、基礎系の講演を中心に聴くことにしました。

今回の学会で最も聴いておきたかった講演はトモシンセシスについての講演でした。私は現在大学の卒業研究でトモシンセシスを用いた研究をしています。そのためこの講演を聴くことでより理解を深め、今後の研究に役立てようと考えました。トモシンセシス(基礎)の講演のなかでは、森孝子先生による「トモシンセシスと CT による画質比較のための人工骨頭挿入骨ファントムの作成」や、田村美恵子先生による「人工骨頭挿入骨ファントムを使用したトモシンセシスと CT による画質の定量的比較」など骨ファントムを使ったトモシンセシスと CT の比較についての発表があり、今後の研究の幅が広がりました。さらに永井優一先生による「トモシンセシス法の再構成法及びスライス厚と画質評価」、福井亮平先生による「トモシンセシスによる任意高さにおける MTF の検討」などトモシンセシスによる画質評価といった、私が研究していることとは違った観点からのトモシンセシスを使った研究発表もありました。なかでも森下あゆ美先生による「トモシンセシスにおける金属対応フィルタの臨床評価」、丸山智之先生による「トモシンセシスの画質の最適化」の発表は印象に残りました。私はトモシンセシスの再構成方法であるシフト加算とフィルタ逆投影法を使った画像処理の研究をしています。森下あゆ美先生と丸山智之先生は新しい再構成方法であるフィル

タ逆投影法の Metal や CE 法を使って研究されており、まだ私がしていないことだったので、今後の研究に非常に参考になりました。またトモシンセシス(臨床)の講演のなかでは、中村修士先生による「トモシンセシスにおける手根管撮影法の検討」、油原俊之先生による「トモシンセシスにおける適正収集回数の撮影部位別検討—手関節撮影—」、清水薫先生による「胸部トモシンセシスにおける撮影管電圧の初期検討」、五味志保先生による「乳腺トモシンセシスにおける臨床的有用性の検討」など臨床分野での発表もあり、臨床経験のない私にとってたいへん興味深いものでした。今後私の研究を臨床にまで広げていきたいと思いました。そして、今研究していることをさらに深めていけばこのような学会の場で発表でき、今後の臨床現場でも役立つ日がくるのではないかと希望が持てました。

また会場には機器展示もありました。最新の撮影装置や画像処理技術が多く展示されており、これから臨床現場で自分が働くときに使うかもしれない装置や技術なので非常に興味深いものでした。

今回この学会に参加させていただいたことにより、まだ経験のない臨床分野のことや医療機関が抱えている課題や問題点、さらに実際に行われている研究や解決策に関しても知ることができました。この経験を生かし、今後診療放射線技師として臨床現場で働きながらも、現場での課題や問題点、解決策、さらには興味のあることなどを研究し、このような学会の場で発表できるように努力していきたいと思います。

この学会のなかには学生の発表も多数あり、たいへん刺激を受けました。このように学生の意識を高めることで、学生同士お互いに刺激を受けながら、医療現場で活躍できる人材を育てていけることを期待しています。

今回の学会では、自分の研究とは違う内容の発表を聴くことができたり、最新の装置や技術を知ることができたりとたいへん充実したものになりました。今後とも積極的に学会に参加することで、さらに知識や興味を深めていきたいと思っています。

最後になりましたが、私をこの総会学術大会に選

出していただき、このような貴重な機会を与えてくださいました、小寺吉衛学会長、石井 勉大会長、大

会実行委員会、日本放射線技術学会関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

学生のページ

第 66 回総会学術大会に参加して



金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻
菅 博人

はじめに

日本放射線技術学会総会学術大会に参加するのは今回で3度目になります。初めて総会に参加したのは一昨年でした。そのとき大学で受けた授業と実際の医療技術があまりに遠く感じ、また、口述発表を聴いてもほとんど分からなかったことからとにかく勉強しなければ、という思いに駆られたことを覚えています。2度目の昨年は自分の研究課題に関連する分野の口述発表やCyPosを事前にチェックし、勉強をしに行きました。しかし、新たな手法や考え方など勉強になることはたくさんありましたが、自分の研究課題に直接関係のある発表は少なかったように感じました。それらを踏まえて、今年の総会では関連分野のみならず、興味のある口述発表やCyPosを見に行き、勉強することを目標にしました。自分の分野の論文を徹底的に調べ上げていくことがもっとも大切で、研究に占める割合はとても大きいと思います。しかし、昨年の総会から約1年の間に研究を進めていくうち、関連分野の論文などを調べるだけでは、研究の独自性を生み出すことが難しく、少し離れた分野の知識も持つことが大事ではないかと考えさせられました。普段、大学で研究を進める中で関連分野外のことを調べ、考える機会がそう多くはありません。そこで、この規模の大きい総会が今まで知らなかった方法や新たな考え方、見方を発見する機会と考えました。

また、今回はアブストラクトが採択され口述発表をすることになりました。専門的な知識をお持ちの方々とディスカッションができる貴重な場で自分の研究を磨きあげる絶好の機会です。得られるものが一段と多くなると期待して本大会に臨みました。

発表の聴講

私の研究課題に大きく関わるMRIを中心に興味のある画像処理関係の発表をみることにしました。MRI



Photo 宮地教授と研究室のメンバー(左から2番目が筆者)

の分野のセッションでは難解な理論、手法が多く、メモを取りながら発表を聴きました。加えてセッションが終わった後に復習し、その発表のCyPosを見たりしてなんとか理解に努めました。また、興味のある画像処理関係の発表では面白い画像処理や今まで見たことのない評価の方法など、大変勉強になりました。

研究発表

私は今回の総会学術大会で口述での発表がありました。演題名は「Analyses of dynamic changes of cell structures of the brain with q-space diffusion during cardiac cycle」です。この研究はMRIを用いて得た脳の拡散強調画像からq-space解析を行い、これに心周期の情報を加えることで脳局所の水分子の拡散だけでなく、脳局所の力学的特性の情報を得るというものです。私の演題は臨床への応用が可能であり、質疑の内容は今回用いた手法が他の疾患へ応用できるかどうかという点に尽きました。現在、この演題で発表した以外の疾患についても調査中であったことから落ち着いて答えることができました。さらに質疑応答のときに私たちの研究が聴衆の方々の興味を引いた

ことからその新規性を再確認し、一刻も早く論文での発表を目指そうと思います。

おわりに

今回の学会では、さまざまな発表の聴講や演題発表から多くのことが学べたように思います。今後も積極的に学会に参加することで多くの発表を通して多くの方とディスカッションしていきたいと考えています。さらにそこで多くの方と出会い、自身の知識をつける

とともに新たな目標に向けて奮闘したいと思います。

謝 辞

今回が学生として参加する最後となる総会学術大会への学生会員派遣に選出していただき、貴重な勉強の機会を与えていただいた小寺吉衛学会長、石井 勉大会長、総会学術大会実行委員の皆さま、ならびに日頃の研究にご指導いただいている金沢大学医薬保健学研究域 宮地利明教授に深く感謝申し上げます。

学生のページ

学生の視点から 第 66 回総会学術大会に参加して



京都医療科学大学医療科学部放射線技術学科
小林弘幸

私は大学生として最終学年である年に、今回の総会学術大会に参加した。私にとって研究は、大学での卒業研究が初めてであるため、最新機器の展示、諸先輩方の研究発表は必ず刺激的なものになると期待し、総会学術大会に臨んだ。

私は、今回の総会学術大会に「知識を増やす」という目標を持って臨んだ。日進月歩である医療機器の最新技術をこの目で見て、その医療機器に触れる機会が得られることに期待を持っていた。最新の医療機器の技術に触れることで、今までの知識が深まることはもちろん、これから学んでいく知識に対しても柔軟な姿勢を持って取り組めると考えていたからである。

臨床研究の発表、学生研究の発表を多く聞き、研究者としての視点を学べる点にも期待を持っていた。まだ学生である私にとって、現在臨床現場ではどのような点に着目し、研究が行われているのかとても興味があった。また、学生研究では、簡単に臨床データが取得できないため、どのように創意工夫し研究が行われているのかという点にとっても興味があった。

今回の総会学術大会で私自身の研究発表はなかったが、この機会に多くの研究発表を聴き、自分のこれからの研究に繋がる学術大会にしたいと考えていた。

私は、X線撮影技術であるトモシンセシスに学術大会に参加する前より興味があった。トモシンセシスは FPD の導入後著しい進歩がみられ、今回の学術大会においてもセッションが設けられるほど注目されていた。トモシンセシスの研究発表は基礎から臨床ま

で興味深い内容の発表ばかりでとても刺激的なものであった。特に、トモシンセシス(基礎)のセッションではファントムの作成など創意工夫点を多く見ることができ、多くの収穫があったように感じた。

画像工学・画像処理(画質改善)のセッションにも参加した。単純 X 線画像のデジタル画像の分野に興味があったので、こちらのセッションも学術大会参加前より大きな期待を持って参加した。セッションに参加してみて、画像処理による高画質化から低線量撮影へのアプローチを学ぶことができとても興味深かった。撮影モダリティの高性能化によって画質改善や被曝低減がなされてきたが、改めて画像処理について考えることができ、とても満足できる結果を得られたと感じた。

何よりも、実際に研究発表を聴き、発表方法や質疑応答など発表の方法を学ぶことができたことも大きな収穫だと感じた。

今回の総会学術大会を通して、多くの研究発表を聴くことができた。このことが、今後の私にとって大切な経験になったと確信している。実際に諸先輩方の研究発表を聴いていくなかで、創意工夫の仕方、研究に対する姿勢や着眼点を多く学ぶことができたと感じた。この経験を、現在大学で行っている卒業研究に活かしていきたいと考えている。学生の研究では、臨床データが取得できにくいため、創意工夫が多く必要になってくると考えられる。今回の学術大会を通して学ぶことができた経験を活かしたいと考えている。

今後、私が診療放射線技師として臨床現場に出た

後も、一研究者として今回学んだ姿勢や着眼点を生かして研究発表に参加していきたいと考えている。そして、次に学会大会に参加する際は発表者として、今回の経験を多いに活かしたいと考えている。

学生にとって実際に研究発表を見ることができる機会は、大きな刺激になると実際に体験して感じた。今後も学会大会への学生派遣を積極的に行っていただけことを願望している。

研究発表のなかでは、学生による発表が多く、発表の着眼点、創意工夫などすぐに生かされる経験が多いと感じた。このことは、学生の研究意欲向上に繋

がると感じた。学生の頃から研究意欲を高めることが、将来研究の場で活躍できる診療放射線技師の育成に繋がるものと確信している。

今回の総会学会大会への派遣学生会員に選出していただき、このような貴重な経験を与えてくださった、小寺吉衛学会長、石井 勉大会長、大会実行委員会、日本放射線技術学会関係者の皆様、ならびに日頃より多大なるご指導をいただいております。今回の応募を応援していただいた小田敍弘先生をはじめ、京都医療科学大学の先生方に対し、深く感謝するとともに御礼申し上げます。

学生のページ

第 66 回総会学会大会に参加して



藤田保健衛生大学大学院保健学研究科医用放射線科学領域
西井 厳夫

出発前に総会学会大会にどのような期待を持っていたか

私が初めて総会に参加したのは、昨年の第 65 回日本放射線技術学会総会学会大会でした。初めての学会ということもあり不安や緊張もありましたが、その反面期待で胸はいっぱいでした。そのような気持ちを抱きながら学会会場へ向かった私を待っていたのは驚きの光景でした。参加者は多く、発表会場はどこも広くて多数あり、そして展示ホールで行われていた機器展示のスケールの大きさにただただ圧倒されるばかりでした。発表者は皆誇らしく見え、私も来年はこの場所で発表できたら良いと感じました。こうして初めての学会に参加し、「来年は総会学会大会で発表する」という目標を立てることができました。学会終了後、研究内容も決まり何度も実験を重ねることで第 66 回の総会に応募でき、見事採択されました。今回の総会は発表もあり学生派遣生ということもあって、昨年とはまた違った緊張感を持って学会に臨みました。

研究発表内容について満足できる結果が得られたか

私は放射線治療に関わる研究室に所属しており、現在 IMRT の分野で注目されている現像処理を必要としない radiochromic film を用いた研究を、昨年の中旬から進めてきました。初めのうちは分からないことも多く、満足のいくデータを得ることもできません



Photo 研究室のみなさんと会場前で記念撮影

でした。しかし、指導をしていただいている先生のアドバイスのおかげもあり、なんとか納得のいく結果が得られるまでに至りました。

研究発表の成果は得られたか

今回の研究は治療装置で照射した radiochromic film を解析できるソフトを作成することでしたが、作成したソフトにはまだ幾つか問題点がありました。発表の目的は解析ソフトを紹介することなのはもちろんですが、問題点を解消するためのアドバイスをいただきたいというのもありました。幸運にも発表後の質

疑応答の時間に適切なアドバイスをいただけたので、解析ソフトの改善に繋がれると思います。

この経験を今後どのように生かしていきたいか

学生として参加する総会は今回で最後になりますが、来年からは放射線技師として参加したいと考えており、学生のとときはまた違った観点から発表を行い、また聴くことができると思います。

日本放射線技術学会に期待すること

学会は春の総会学術大会、秋季学術大会だけでなくさまざまな地方部会も存在します。地方部会は自分の住んでいる近辺で開催されるので、私のような学生でも気軽に参加できる環境にあります。学会に参

加することで研究意欲は向上し、自らの知識を深めることもできると思います。より質のよい放射線技師の育成および更なる業務の発展のためにも、このような活動を是非続けていただきたいと感じています。

謝 辞

最後になりましたが、今回第 66 回日本放射線技術学会総会学術大会学生派遣に選出していただき、大変貴重な機会を与えてくださいました小寺吉衛学会長、石井 勉大会長、日本放射線技術学会関係者の皆様、ならびに日頃からご指導いただいている藤田保健衛生大学 加藤秀起先生、林 直樹先生および今回研究に協力していただいた共同研究者の方々に深く感謝いたします。



第 66 回総会学術大会に参加して



九州大学大学院医学系学府保健学専攻
松山倫延

総会学術大会での目標と期待

私にとって、第 66 回総会学術大会は初めての全国規模の学術大会であり、自身の研究内容を多くの人に知っていただく非常に良い場だと感じていました。そのため、自分自身の研究発表の準備は決して妥協はせず、悔いが残らないように取り組みました。また、今回の学会では、自身の研究発表を行うことだけではなく、他の演者の研究発表や講演に対して質問を行うことを目標にしました。そして、多くの最新の研究や技術に触れ、少しでも吸収したいと期待を持って学会に臨みました。

研究発表の準備と成果

今回、私は「画像工学 画質評価(FPD・LCD・CR)(CyPos)」のセッションで「環境照度が医用 LCD モニタのコントラスト応答試験に及ぼす影響」(演題番号 6)の発表を行いました。CyPos 発表ではこれまで行ってきた研究内容を 5 枚のスライドと 3 分の発表でまとめないといけません。発表の準備を行うにあたって、簡潔に分かりやすく説明する難しさを痛感しました。自分自身はよく理解している内容ですが、初めて聴く方にもよく理解していただけるように先生や先



Photo 学会場にて(左から3番目が筆者)

輩方と何度もミーティングを繰り返して、内容を推敲しました。

研究発表当日は、朝から緊張をし、同じ大学院の友達と一緒に最後の練習を何度も何度も行いました。本番では、無事に発表を終えることができ、今後の研究に大いに参考となる質問や意見・提案をいただくことができました。

研究発表・シンポジウムの聴講

大会期間中は多くの研究発表・シンポジウムに参加することができ、どの内容も私にとって、新しい情報や今までに得た知識の再確認となり、非常に有意義なものとなりました。特に、医療情報フォーラムで埼玉医科大学総合医療センターの松田恵雄先生が講演された、『「医用画像表示用モニタの品質管理に関するガイドライン」改訂報告』は私自身の研究内容に直接関連していることもあり、非常に印象に残った講演でした。ソフトコピー診断が普及している現在、医用モニタの品質管理は重要となり、今回、品質管理の指針である当該ガイドラインの改訂内容は非常に興味深いものでした。この講演で、臨床現場で働いている診療放射線技師の方々が医用モニタの品質管理に対して、どのようなことに興味や疑問を持っているのかを知ることができました。また、この講演で、総会期間中の目標の一つでありました「他の演者の研究発表や講演に対して質問を行うこと」を達成することができました。

この経験を今後どのように活かしていきたいか

このように、私自身の研究内容が臨床現場で働いている診療放射線技師の方々が抱えている興味や疑問に非常に結びつきが強いことが本総会に参加することで、

改めて理解することができ、研究内容が重要なものであると自信を持つことができました。日常、臨床を行っている診療放射線技師の方々と接することの少ない大学院生の私にとって、本大会で知ることができる内容はとても有用なものです。この経験を活かして、今回、発表を行った研究内容を論文化し、もっと多くの方々に私の研究内容を知っていただきたいと思います。また、現在の研究成果に満足せず、さらに発展をさせ、課題を追究していきたいと思います。

謝 辞

このたび、第66回総会学術大会への派遣学生会員に選出していただき、このような貴重な機会を与えてくださいました。小寺吉衛学会長、石井 勉大会長、本学会関係者の皆様に深く感謝いたします。また、日頃から多大なるご指導をいただいている杜下淳次先生をはじめ、九州大学の先生方に深く感謝するとともに御礼申し上げます。

最後になりましたが、私が所属します九州大学杜下研究室のホームページを紹介させていただきます。所属学生の活動を中心に随時更新を行う予定ですので、是非ご覧ください。

URL <http://web.shs.kyushu-u.ac.jp/~jm/>

学生のページ

第66回総会学術大会に参加して



金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻
宮本奈菜子

はじめに

2010年4月8日から11日にかけて、パシフィコ横浜にて日本放射線技術学会第66回総会学術大会が開催され、私は学生会員派遣として参加させていただくことができました。私が本大会に参加させていただくのは2度目となります。初めて参加した昨年は、規模の大きさや演題数の多さに圧倒され効率良く動くことができず、大会終了後に振り返ってみると後悔と反省点ばかりが残ったことを覚えています。今年は、放射線技術に関する数多くの研究内容を聴講でき、最新の情報に触れることのできるこの大会に参加することで、自身の研究に関わるだけでなく放射線

技師として必要な知識を多く習得することを目標に大会に臨みました。

スケジュール

計画的に動くことのできなかった昨年の反省点を踏まえて、今年は予稿集を熟読し、事細かな「大会参加中のスケジュール」を作成いたしました。会場が大変広いということから移動時間なども考慮に入れ、また自分の聴講したいセッションの間にCyPos閲覧を組み込むなど、1分1秒も無駄にしない気持ちで計画を立てました。大会開催中は、実際にこのスケジュールどおりに動くことができ、本当に密度の濃い大会参

加とすることができました。

演題発表および聴講

今年の大会において昨年と最も異なる点は、演題発表をさせていただいたことです。発表は口述形式で、「SPECT/CT 装置の X 線 CT に基づく線減弱係数の評価」という演題名で行わせていただきました。このような大規模な学会での発表は初めてであり、それに加えて発表が 4 日間のうちの最終日であったため、初日から常に緊張しながら大会に参加していました。実際の発表では、緊張で声が震え言葉に詰まる部分もあり、自分の経験不足を痛感させられましたが、発表内容を何度も推敲したことやあらゆる質問を想定して勉強を積んだことに対する達成感は大きなものでした。ひと目見て分かりやすいスライドを作成すること、7 分間という決められた時間での確に内容を伝えることなど、演題発表には多くの乗り越えるべき課題があることを再認識し、今後臨床に出てからも続けていきたいと考えている研究に対する意欲に繋がったと感じています。今回、演題発表という貴重な機会をいただけたことに大変感謝しています。

演題は、自分の研究分野であります核医学を中心に聴講しました。聴講した一般演題では、質疑応答も活発に行われており、発表内容を十分に理解したうえで疑問に感じることや質疑に対して的確に答えることの重要性を感じながら聴講しました。

CyPos

発表に使用されるスライドを閲覧することのできる CyPos を、昨年はあまり利用しなかったのですが、今年は空いた時間を見つけては利用していました。どのような発表なのかあらかじめ閲覧するだけでなく、実際の発表で聞き逃してしまった箇所を復習することにも活用できました。多いときには CyPos の席が空くの待つ人の長い列ができることもあり、CyPos の利用率の高さをうかがい知ることができました。

研究室懇親会

学会の際、研究室に在籍している社会人院生の方々



Photo 発表終了後に指導教員(左)と

も交えて研究室懇親会を開催するのが恒例となっています。今年もお忙しいなかご参加いただいて開催することができました。学生の立場の私にとって、臨床と研究の双方でご活躍されている社会人院生の方々とお話しさせていただける機会は大変貴重で毎回身が引き締まります。懇親会が自身の発表の前日であったので、多くのアドバイスや応援の言葉をいただき、大変励みとなりました。

おわりに

今回総会学術大会に参加させていただき、学生の立場では普段なかなか知り得ることのできない臨床に基づいたことや最新の情報に多く触れることができました。今回習得できたことを活かし、研究に励み向上心ある放射線技師を目指していきたいと思います。

謝 辞

最後になりましたが、私を第 66 回総会学術大会への学生会員派遣として選出していただき、このような貴重な機会を与えてくださいました、小寺吉衛学会長、石井 勉大会長、ならびに大会開催委員会、日本放射線技術学会関係者の皆様、また日頃ご指導いただいております金沢大学 小野口昌久先生、研究にご協力いただいている方々に、深く感謝するとともに御礼申し上げます。

学生のページ

第 66 回総会学術大会に参加して



名古屋大学大学院医学系研究科医療技術学専攻医用量子科学分野
山田麻希

私は今回の総会学術大会にあたり、おもに二つの期待を持っていました。一つは最先端の医用放射線技術に触れる機会を得られること、もう一つは診療放射線技師が今後どのように研究に関わっていくべきかについて考えるヒントを得られることです。また私は現在大学院においてマンモグラフィに関わる研究に取り組んでいますので、数々の演題発表のなかでも乳房撮影に関する発表に興味を持っていました。

実際の総会学術大会では、私が期待していた以上に多くの物事に触れることができました。

機器展示では photon counting の技術を用いた乳房撮影装置を実際に見ることができ、この装置については特別講演においてメーカの方のお話を聞くこともできました。ジョークを交えて楽しくお話をしてくださったこと、また装置の detective quantum efficiency (DQE) が高いというデータが強く印象に残っています。また同じく機器展示において、トモシンセシスによる乳房断層像を実際に見ることができました。トモシンセシスの画像を実際に間近で見るのは初めてで、確かに現在普及しているマンモグラフィ画像に比べて乳腺内腫瘍をとらえやすいということを実感しました。私にとって総会学術大会の参加はこれが3回目でしたが、機器展示において従来とは異なる技術・装置を目にするたびに、さまざまなアプローチでよりよい医用画像を得ようという技術者の努力を感じるものです。また同時に、自分も医用放射線技術の推進力になり得るのだから精進しなくてはと改めて思いました。

研究発表では、これらを通して私と同じような乳房 X 線撮影における画質や撮影条件の研究をなさっている他施設の先生方と交流を持つことができました。その方たちには会期中に参加させていただいた画像研究会の交流会でお会いしており、私の研究発表後にコメントをいただけたことは私にとってとても大き

な励みになりました。身近に画像の研究をしている方が少ないとお話してくださり、それでも日常業務に加えて研究にも熱心に取り組んでおられると伺いました。

今回の総会学術大会に参加し、以上のように医用放射線技術の進歩を感じ、それに尽力する方々とお会いすることができました。これをふまえて、診療放射線技師が今後どのように研究に関わっていくべきかについて以下のように考えます。技術というのは、進歩し利用されることで意味を持つものだと思います。実状として、すべての診療放射線技師が医用放射線技術の進歩に関わる基礎的研究に携わることはできないでしょう。しかし、技術の進歩によりもたらされる新しい知識は、すべての診療放射線技師によって共有され、利用されるべきです。それが技師というライセンスを有意義なものとし、そのライセンスを持ったスタッフによって医療が提供されることで、医療の質が維持され则认为ます。これまで培われてきた医用放射線技術学を臨床で駆使するにあたって積み重ねるべき知識は膨大で、さらにそこへ新たな発見を求めておられる現場の先生方を私は心から尊敬します。私は今後診療放射線技師として働くことを考えておりますが、知識の更新を怠らずに、医療の質を、また医用放射線技術の質を維持向上させられるような仕事をしたいと考えます。それにあたり、今後も日本放射線技術学会には貴重な情報交換の場を提供いただき、放射線技術に携わる人すべての人に励みを与えてくださることを期待しています。

最後になりましたが、このたびは学生派遣として第 66 回総会学術大会に参加させていただき誠にありがとうございました。この場をお借りしまして、日本放射線技術学会の運営に携わっておられる皆様、会員の皆様に心より御礼申し上げます。